

猛禽類の繁殖場所では 小鳥の数が多い ——大型動物の保全は小型動物の 保全につながるか？——



写真1 V字に羽の位置を保ち、滑るように湿地の上を飛ぶチュウヒ。大きく数を減らしてしまい、絶滅が懸念されています。

大型動物と生き物の保全

ワシやタカ、フクロウなどの猛禽類は神秘的な魅力を持っています。こうした大型動物は、しばしば保全活動のシンボルとして大切に扱われます。それでは、大型動物の保全はそれ以外の生物、例えば小型動物の保全につながるのでしょうか？こ



中村 太士
北海道大学 教授



先崎 理之
北海道大学 大学院生



山浦 悠一
林業研究部門 森林植生研究領域
主任研究員

の問題は、近年大きな議論を呼んでいます。

湿地の猛禽類ーチュウヒーによる検証

私たちは、湿地で繁殖する大型鳥類のチュウヒ（写真1、2）を用いて、この問題を検証することになりました。チュウヒは湿地の減少にともない数を減らしている猛禽類です。絶滅が懸念されており、湿地性生物の中でも特に保全の必要性が高い種です。

私たちは3年間にわたる調査で、チュウヒがどの湿地で営巣しているか、何羽の雛（写真3）を巣立たせているかを明らかにしました。そしてチ

ュウヒの巣立ち雛数の多い湿地と少ない湿地で、小鳥の警戒声を拡声器で流しました。小鳥の性質を利用したこの手法により、小鳥の親鳥の数だけではなく、小鳥の巣立ち雛の数を効率的に数えることができました。

その結果、チュウヒが長年生息し多くの雛を育てている湿地は、多くの小鳥の種で、親鳥と巣立ち雛の数が高いことが明らかになりました（図1）。チュウヒがキツネなどの共通する捕食者を追い払ってくれるため、小鳥はチュウヒの巣の近くをよい生息環境として選択していることなどが原因として考えられます。

大型動物の価値を生かす

この結果は、他の猛禽類や大型動物、生態系でも通用するのでしょうか？もしそうならば、生き物の保全活動に大型動物の生息地の保全を組み込むことで、生き物の保全活動はより社会的に注目され、社会的な支持を集めることができるでしょう。大型動物は大きな社会的価値を秘めています。



写真2 チュウヒの成鳥（オス）。オスは巣で待つメスと雛に餌を運びます。



写真3 チュウヒの巣立ち雛。1つがいから最大4羽の雛が巣立ちます。

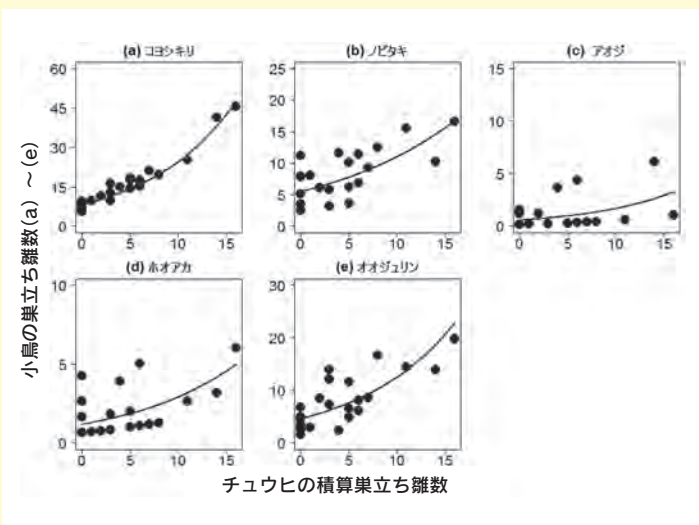


図1 小鳥とチュウヒの巣立ち雛の数の関係。実線は統計モデルによる推定値。

※詳細は、Biological Conservation 191: 460-468, をご覧ください。